

バの森蔭にて

帯医のノートより

田淵四郎

金剛出版



オ・シヤバの森蔭にて

ある熱帯医のノートより
田淵四郎著

金剛出版

著者略歴

昭和29年 名大医学部卒業，外科医，医博

昭和30年より三菱重工株式会社へ勤務

（この間出張にてインド，パキスタンに在勤）

昭和42～43年 日本鉱業KK調査団に同行

コンゴ民主共和国（現ザイール）に勤務

昭和46～47年 SODIMIZA（日本・ザイ

ール合弁会社）病院長として，病院建設の

ためザイール共和国に勤務

昭和39年より日本熱帯医学協会員（現参与）

現住所 東京都世田谷区奥沢 1-2-8（604号）

オ・ジャバの森蔭はて

© 1973

昭和48年10月20日 印刷

昭和48年10月30日 発行

定価 750 円

著者 田 淵 四 郎

発行者 淵 上 祐 史

印刷 高野印刷

製本 河上製本

発行所 株式会社 金 剛 出 版

東京都文京区水道1-5-16

電話 (03) 815-6415 (代)

振替口座東京 34848番

0026-739009-2354

も

く

じ

I オ・シャバへの道……………九

新生コンゴへの誘い……………九

オ・シャバとは……………二六

II オ・シャバの自然と風土……………二四

花暦……………二四

蟻塚と蟻の塔……………二五

山の幸……………二五

トンボ、蝶、カメレオン……………二五

廃坑のコバルト・フラワー……………二五

緑の露頭、マラキット……………二七

ルアブラ川……………二八

キリマ・ミサラワとキリマ・ルイナ……………二八

ルアラバ源流と樹皮舟……………二九

チャンガレラ湖……………二九

マニカ高原とウベンバ国立公園……………二九

Ⅲ 森のくらし……………八三

炭焼き……………八三

森の猟師……………八六

森の牧人……………八六

森の歌……………九一

森の住居……………九五

ソンベとブツカリ……………一〇三

ソルゴとミレー……………一〇五

髪のおしゃれと文身……………一〇八

マルシェ・ノアール……………一二一

Ⅳ 診療日記……………一二四

双子のお産……………一二四

老母のなげき……………一二八

ミアーリスとの出会い……………一三三

はかない命……………一三四

V

修道院と医療

ヘルニヤと包茎手術… 一七

アノフェレスと検疫官ンゴイ… 一九

助産婦エリザとトライバリズム… 二五

ザイールの医助手たち… 二九

まえがき… 一四

サカニア修道院と病院… 一四

キプシア修道院… 一四

カケイロ修道院とンガイエ癩療養所… 一六

カセンガ修道院と病院… 一五

カポローウェ修道院と病院… 一六

キレラ・バランダ修道院… 一七

モカベ・カサリ女子修道院と病院… 一八

VI

オ・シャバ点描……………一八七

森のアルチザン……………一八七

森の墓……………一九二

ステファーナ……………一九五

ある放火事件……………二〇一

森の夜道……………二〇三

国道の物売り……………二〇六

カワヘリ・オ・シャバ……………二〇九

あとがき……………二二三

オ・シャバの森蔭にて

I オ・シャバへの道

*
*
*

新生コンゴへの誘い

昭和四十二年の初夏、東銀座の小医院で仕事をしていると、熱帯医学協会の三井専務理事から電話がかかった。「アフリカへ行く気はないか……」、との誘いである。突然の事に咄嗟に返事もならず、「そんな機会を逃したくはないもの……」、と生返事をしておいた。

その夜、行先がコンゴと聞いて長年眠っていた少年の日の夢が勃然と湧き出し、かつて読みふけたリビングストーン探検記だの、映画「スタンレーのアフリカ探検」の中で劇的な邂逅をとげるリビングストーンとスタンレーの握手の場面などが脳裏にチラチラして、高鳴る心臓の鼓動になかなか寝つかなかった。

でも開業して一年——十数年勤務した三菱病院から社用で出張したインド、パキスタンでの数カ月があまりにも強烈な印象となって、平々凡々たる病院務めに耐えられず、飛出してはみ

たものの、心淋しい日々ではあったが——今とてもアフリカへ行けたものではなかった。

そうしたためらいを持ったものの、とにかく一度当事者に会ってどんな話か聴いてみようという三井氏の再度の誘いにつれて、数日後、コンゴの話の出所、日本鉱業の関係者に会うことになった。ところがこの席でとんとんとコンゴへ行く話が決まってしまった。もともとアフリカへ行きたくてうずうずしていたせいもあるが、その時応待に出た日本鉱業側の責任者の村瀬氏が八高の先輩だったこと、コンゴに医者を派遣することになったのは（これまで、日本鉱業は海外に鉱区を求めて多数の人が出張したが医師がついて行ったことはない）、コンゴ出張者の一人がマラリヤに罹患し到着後一カ月ばかりで急死したこと、その原因調査も兼ねて出張した日本鉱業佐賀関病院長の井上博士が出張したときり心細がる現地の日本人に引止められて困っているなど、いろんな点から断わりきれなくなった。また派遣する医師はこの際熱帯医学の知識が必要だが、そう簡単には見つからない。東大の医科学研究所などには専門家がいても、勤務上出掛けられないという。先輩の村瀬氏に、お前たのむといわれて、とうとう開業早々の医院をほうり出して行くことになってしまった。

当時コンゴは旧ベルギー領コンゴからコンゴ民主共和国として独立したものの、部族間の勢力争いに白人の利権をめぐる騒動が加わって、いわゆるコンゴ動乱があった。ようやくモブツ

將軍が現われて治まったのも束の間、カタンガ紛争があったりで、とくに行先のカタンガは人心未だ治まらず、世界有数の産銅会社旧ユニオン・ミニエールを中心に数万もいたベルギー人の大部分は本国に逃げ帰ってしまった。

そのため鉱山や工場は半身不随におちいり、その回復にもモブツ大統領の新政府は日本人を必要とし、旧カタンガ州政府時代に獲得していた日本鉱業の探鉱権を延長するなど日本人に好意的であった。なにしろコンゴ独立戦争当時の風聞によれば、血生臭いことが数多く、多数の白人が殺害されたスタンレービルの惨劇とか、不時着した飛行機の白人乗員が食われてしまったとか、あることないこと不気味な限りであった。

折柄調停に当った国連事務総長ハマーショルド氏はザンビアのンドラ空港を離陸直後にその乗っていた飛行機が墜落、死亡しているが、その行先はルブンバシで、ゲリラが攻撃したという附近が日本鉱業の鉱区でもあった。(実際その附近の国道の道路標識など弾痕だらけである)。こういった不穏なニュースを背景にコンゴ行きの話が進められて行った。

八月に入ってコンゴ派遣が本決まりとなった。出張中の井上院長は年末までには帰らねばならず、現地の医療事情を知るためにも一カ月くらいはダブって勤務する必要がある、どうしても十一月には赴任せねばならぬ。すると三カ月間に開業間もない東銀座の小医院をまかせる医師を探し、西アフリカはフランス語圏だからフランス語の初歩も覚えねばならぬ。なにより必

要なのは東南アジアしか知らない心細い熱帯医の私にとってアフリカの風土病に関する知識を出来る限り集めることだ。そして不可欠な医薬品の補充、外科医として最少限度必要な医療器械も調えねばならなかった。

この年の残暑は特別厳しいように思えた。なにしろ小医院とはいえ銀座裏、つめかける患者の診察は大切だ。それに囑託として隔日半日勤務している三菱の方も決着をつけねばならない。こうして忙しい中にも私は未知の国コンゴを目指して心楽しいが、後に残される妻はやりきれない気持であつたろう。

こんな時に古くからの趣味の友人、先輩から、コンゴ行き話を聞いてあれこれ注文が寄せられる。趣味とはいえ一度は生涯の道と決めた植物学や昆虫採集の仲間たちである。コンゴ産の巨大な甲虫を依頼されたり、樹木の種子はなんでも欲しいというものもある。こんな機会は滅多にないから科学博物館の畏友、昆虫研究室長中根猛彦氏に昆虫採集の指示を仰ぐ。こうした準備は心をうきうきさせるものだ。

十月末、出発の準備がほぼ整ったころ、珍らしく旧任の三菱病院長から呼び出された。開業というから退職をむしろ祝ったが、聞けばアフリカへ行くとか、それならばもう一度三菱へ帰る気はないかとの申し出、私が開業に失敗してアフリカへ行くと思われたらしい。それに今の病院長は私が熱帯医学に首をつっこんだきつかけとなったインド、パキスタン出張を勧めた張

本人でもあったから、開業に反対した妻が聞けば飛びつきそうな話である。パスポートを手にした今、私にとってはなにをかいわんやである。でもこのために私は任期を一年と限り、帰国後は三菱に復職することにして出発することになった。

十一月、秋の気配も濃い夜、羽田を飛び立った。同行は日商駐在員になる岡田氏、海外経験豊かな人との旅は心強い。後に残した家族への心残りも、機上の人となると快い旅の緊張感に、なんとかふっ切れる。

ビザ申請のため下り立ったロンドンには雨だったが意外な温かさ、チョコレートの函の表の絵にありそうな屋並に芝生の青さが不思議だった。滞在した三日間、博物館と植物園で過した。中でも入口にダーウィンとハックスレーの像のある科学博物館ではアフリカの現地にありそうなサバンナの毒蛇のパノラマを観たり、リビングストンなどビクトリア時代の暗黒アフリカで活動した人々をぼんやり想いなどして、まるで探検に行く気分になったものだ。秋色濃い植物園キューガーデンでは降りしきる黄葉を踏み敷いてなにか感慨に捉えられる。

ビザがとれた日、岡田氏の意見でブラッセルに向かわず、パリで飛行機待ちすることにした。ところがロンドンは晴れていたのにブラッセル空港は濃霧のため、サベナ航空は三日経っても飛び立たず、いらいらして当初の観光気分はどこへやら、ジュネーブまで飛んで待つこと

になった。

ジュネーブはもう冬景色だった。レマン湖は鉛色に冷く、雪模様に山もさだかでないし、いたずらに旅心を沈ませるばかりだった。四日目の午後からは空港に缶詰となった。サベナ航空のチケットを持って早い夕食を摂っていると、ブラッセル空港は依然霧に閉ざされているがベルギー国内の予備飛行場からキンシャサ行きサベナ便が発した旨のアナウンスがあり、ようやくほっとする。

午後八時、サベナのDC8に乗り込むと機内は超満員、むっとする人いきれに驚く。座席が満員であるばかりか、赤ン坊の揺り籠がいくつもいくつも棚からぶら下っている。まるで避難民の輸送機だ。岡田氏によれば、カタンガ紛争もようやく解決したのでコンゴ政府の許可が出、カタンガの産銅会社ゼコミン（旧ユニオン・ミニエール）の従業員とその家族を中心に故国に一時避難した人々が帰るらしい。

ベルギー本国はコンゴの二十五分の一の広さしかなく、カタンガの州都ルブンバシ（旧エリザベート・ビル）だけでも三万人ものベルギー人が住み、その大部分はカタンガで生まれ育った人たちである。帰るとして本国では迎える土地も家もない。実際こうしたベルギー植民者たちにとって、故国とはコンゴかも知れないのだ。黒人国家となった今、悲しい立場にある。それ故にこそ外人部隊を雇い、カタンガ独立戦争までおこし、豊かなカタンガの土地と彼らの築い